

## 二人の場合

大山 勇一

一人の人の精神生活をその人に聞くことなく探りだすということはむずかしい。そして何より失礼なことだ。しかし、人と人がつながる時、互いに深く相手の精神のヒタまで理解しようとするだろう。

僕は石川さんにも岩佐さんにも会ったことがない。そして石川さんも岩佐さんも深く知りたいとは今は思っていない。それでも天皇制との関わりで少し二人の方々の精神生活へ踏み入ってみる。

思えば二人の方々は多くの人々に誤解されてきたと思う。二人共、指導者とか客将とか頭目、代表的人物等という言葉には無縁であったのにしばしばマスコミでそう言われた。そしてその悪癖がアナキズムに親しむ人々まで蝕ばみ、有名だとか近づきたい人とかきどっているとかいって一人決めて決めて好悪を判断されてきたのだ。石川さんだって岩佐さんだって感情や思惑で行動したことがあるだろう。しかし多くの人々はそれらまで思想がなせる技だと誤解したのだ。石川さん、岩佐さんともう死んでしまわれたけれども今もそんなので誤解が残っている。その一つ、天皇制のことについて少し記してみ

る。

### I 石川三四郎さんの場合

石川さんが天皇制との間で話題となるのは、皇室中心無政府主義ということと言ったらしいからであろう。僕はそれをくわしくは知らない。試みに大沢正道さんの「石川三四郎」(注一)を見ると、「石川が、敗戦後まもなく公けにした『無政府主義宣言』」で「天皇を中心とする無政府的社会建設というプログラムをかかげ、敗戦の『聖断』に感謝の言葉すらもらしている。」と記されている。このような文章によってどうやら石川さんは戦後、天皇制無政府主義ともいべき考えを発表したことがあるのだな、と知れるのである。

この石川さんの『無政府主義宣言』は現在色々に言われている。例えば三浦精一さんは「石川さんが戦後『皇室中心無政府主義』などというものを考えたことでも分る。戦争中皇国史観に躍らされた民衆の悲惨な姿に涙した石川さんは、その民衆が終戦の詔勅で、おとなしく静まり、新に生きることを考えはじめたのを見て、一つの政治的な配慮をしたと私は思うのだ。」と記している。僕は「戦争中皇国史観によって躍らされた……考えはじめたのを見て、」という理由は民衆を理解していない三

浦さんの言葉として石川さんがそう考えたかわからないが、「政治的な配慮」というのは一つ考えなければならぬ要素だと思ふ。

石川さんの皇室中心無政府主義について著作であつたか、話であつたか、誰かが戦前すでにその萌芽を見るといつていたと思ふ。それは石川さんが『ディナミック』紙上に「有徳の君主は支配者ではない。」と言つたことと関連づけての発言であつたらう。僕は石川さんには有徳の君主という概念があつたという事実と、もち論それとは石川さんは今上天皇を有徳の君主とは思つていなかったらうから無関係であるが皇室中心無政府主義とは関連があると思ふ。それは君主のようなもの、その地、その民族を代表する者、象徴のようなもの、そのようなものはあつてもいいのではないかと考へ方と、支配者はないならない、それなら支配者の權威を民衆が納得して付与できるようなそういう制度で仕方がないのではないか、そういうのがあつても善政を合理的にできる民衆が納得してその權威に従うそれでいい社会ができたら充分ではないのか、このような考へがあつたのではないかと思ふのだ。

大沢さんは前述の文の中で天皇を中心とする無政府的社会建設というプログラムを「天皇制打倒を叫んだ日本

共産党への、みさかいのない反発」「つねに反主流、少数派の姿勢をくずさない石川の反抗精神が社会科学を留守にした結果、たどりついた一つの極点でもあろうか」と論評し、石川さんがこのような傾向を持つ原因を「可能なかぎり、時間、空間にもあそばされた汚れを、対象からぬぐいおとし、普遍なものをつかみとらうとする。」

その結果、「具体的な現実の問題を解きあかすのに役立つ思考の角度をもたず、あるいはもとよりしなかつた。」ためであらうとしている。僕はこのような点もあつたらうかと思ふ。しかし、これでは石川さんは充分に解き明されているとは言えないだらう。僕は石川さんも「具体的な現実の問題を解きあかすのに役立つ思考の角度を」持つていたと思ふ。それは例えば堺利彦などの選挙行動に対する態度からサンディカリズムに対する対応、更には天皇制に対する対応すらそう見れないことはないと思ふ。この論文は大沢さんを言及する文ではないのであまり指摘しないが、「問題を解きあかすのに役立つ思考の角度」というような考へ方の中にも大沢さん自身の弱点があるように思ふ。すなわち思考万能的考へ方、考へ、考求し、思索し、そして行動するといふような観点を一律に律することはどのような人々にも妥当ではないように思ふ。

石川さんがなぜ「有徳の君主」という観点を持つていたのかが一番問題になると思ふ。僕はこれは石川さん自身、正義という概念から出発して持つに至るというのではないと思ふ。というより、石川さんは共和思想を持つていただらう。石川さんはクリスチャンの時ですら恋愛をつきつめた形で考へていた。このようなつきつめた考へ方は明らかに他にも見られ、それは石川さんの一つの傾向になつてゐる。石川さんが共和思想に關し広範に語つてゐる所は僕は不勉強だからよく見ていないが、平等という概念は持つていたし、それをつきつめるなら共和思想は自然に出てくるので、かく僕は思ふのだ。このような無政府的一般概念を持ちながら石川さんは「有徳の君主」といつたか、僕はこれは石川さんの個人史と状況に対する判断によるものだらうと思ふ。石川さんは明治の自由民権運動とも少しく関係してゐた。当時、自由民権運動は思想による運動ではなく、憲政の運動であつた。ために運動内部にいろいろの思想的傾向が混在してゐた。僕は自由民権運動が日本の無政府主義運動へ全面的に展開したとは思ふないが、無政府主義思想も自由民権運動の中に見ることができると主張できる。一八七六年（明治九年）、エルヴィン・ベルツは日本へ雇われ外人としてやつてきたがその日記の中で早くも十一

月二日の頃に「先走りの連中にいたつては、早くも共和政体を夢みていた」と記してゐる。この辺の事は後で「自由民権運動とアナキズム」といふような題で書く予定だから詳しくは記さないが、石川さん自身もおそらく自由民権運動の中で虚無党や共和思想を吸収したと思ふ。しかし一八八二年（明治十五年）頃になると共和思想は自由党の中で国体に反するとして排斥されてゐる。いわば国体に反するといふ大逆犯が自覚され、以後急速に天皇に關することは禁句となつていく。石川さんもこの事情を精神的土壌の中に組込んだと思ふ。更に宮下太吉などの大逆事件は石川さんを用意深い発言の仕方にしただらう。このような中で海外における市民革命を経験した社会での市民生活は石川さんに土俗の永遠性を自覚させたと思ふ。上があつてもなくても続いていく生活、そして理想的社会とは何か。帰国した石川さんは天皇制のきびしい桎梏を再び感じる。このような中で東洋史を中心に読書を始め、歴史が常に支配者の歴史であることをいやだなく見つめていく。最初の「有徳の君主」云々はこのような中で発言されたものではあるまいか。

戦後、石川さんが天皇制無政府主義といわれたそうだが、僕はそれがいつ、どこで、どのようにしてなされたか、まったく知らないのである。それでもそのことにつ

いて少し記す。一般に今迄の文章を見ると石川さんがそう発言したとしか記していない。僕はどのような状況の中でそう発言したのか、これを問題にしないでならないうと思う。まず、いつそういったのか。もし旧憲法下でそういったのなら明らかに犯罪化することに対する予備があつたと思う。そういう斟酌を踏まえて石川さんの天皇制無政府主義も考えねばならないと思う。(つづく)

## ●一波万波

☆ 逸見吉三著「墓標なきアナキストの群像」の冒頭に出てくる台湾のアナキスト張維賢君が民国六十六年五月十八日口腔癌で七十三歳で台北市の自宅で亡くなったと小生の所に通知がありましたので、お知らせいたします。小生は彼とは昭和三年、東京銀座裏にあつた東京印刷工組合の二階事務所で山鹿泰治氏が講師でエスペラント語の講習会が開かれた時、そこで一緒に講習を受け知り合ったのが始めてです。その後昭和九年小生が台湾へ渡り数年間台北に勤務した折再会して交遊関係を持ちました。彼は昭和のはじめ日本へ行く前、台湾黒色青年連盟に関係したとして総督府につかまり何カ月か刑務所暮らしをし

ており、その後、昭和十年無政府共産党事件が日本内地で起きた時も、警察に引っぱられています。もちろん事件に関係はないため、それでも二ヶ月くらい警察に留置されていました。台湾では何時も注意人物でした。その後昭和十二年日支事変勃発後上海に渡り逸見氏の著書にあることもやったことでしょうが、太平洋戦争後上海から台北に帰り、農業をやったりは商売をやったりしたけれども、どれも思わしくなく、最近ではブラブラしていたということです。(水沼浩)

### 張維賢

五月十八日午後十時47分、口喉がんで死亡、七十八才

台湾でもアナキストとして節を守り常にグループ活動を続けていた。(三浦)

☆ その後お変わり有りませんか  
リベルテール毎月有難う御座居ます。

と、ここまで書いて、三〇分以上もペンを握ったまま何を書こうかと、想念に、イライラしたり、面倒くさくなったりしている訳です。

もう二カ月前から切手を買って、送ろうと思っていま

したが、やはりそのままの状態で、ほったらかし、お許し下さい。

二・三日この社会主義者と話しをしていて、頭にきたのが何でもかでも彼らは労働者の権利とか、階級意識とか云うことで、運動の発端を考えがちです。私は人間のもつ、愛とか同情とか云う原初的な感情からしか運動の発展、人間性の追求が出来ないように思っているのですが、彼らは全くその逆の論理構成の上で物事を考えるので、どうも話が合わなくイヤな気持ちになります。それはマルクス主義者だけに限らず私達の陣営に時々見受けるように思えるのです。

……だから階級意識が出てこないとか、どうも私にはピンと来ないものです。

△階級意識Vという言葉のもつイメージが私のものと違うのではないのでしょうか、ロジックがにがての私の為かへん屈的な私の性格の為か。

ただ、彼の言っていることは、そうじゃなくて彼のはブルードンが云うような階級意識を云っているのだとか、私は私の理解出来るように善意に理解し、満足し、イヤなイメージを押し込んで納得したりしている次第です。

ブルードン時代の△階級意識Vという言葉をあの時代の庶民達はどういう風に理解していたのでしょうか、やはり

りその時代背景を裏打ちにしたものが、あの言葉に集結されたものだと思うし、また、庶民達もその言葉のもつイメージ、想念に共鳴し理解したことでしょう。現代はテレビ等のマスコミの過剰発展の為、価値感及びイメージ観が個々人多様に拡がっているように思えるのですが同じようなことを言いながら実際は何か違うんだなアというような時が多分にあるように思えるのです。こういう時にはコミュニケーションを保つ、すなわち本当の意味での共感を呼ぶ伝達手段が必要ですが、それはやはり言葉しかないのですが日本人の深層基盤、いうなら言葉の持つ印象が語りかけ、そして理解し、共鳴し動いて行くことが必要ではないかと、観念的な夢物語を追ったりしている訳です。

こんなことを書きながら、やはり自分も言葉を駆使して手紙を書いているのですが……。

話が変わるのですが、(と、ここまで来てペンを握って書こうか書くまいか考えています。どうも、大ゲサになつてしまいです)

ブルードン、自治管理、自由連合、全くその通りで、私達の理念ですが私にとって今の所、その全部に共通するブルードン自身の人間性、ピュリタンの性格を抜きに考えると、変な方向に行きそうな気がしたり……。

他を自己と同じに尊重する、これが自由や平等に結びつき、連合論や自治主義が考え出されたりするもので後者の論理ばかり注目したりすると、クリープを入れないコヒー見たいな味を覚えるのです。

自己の持つ革命と反動、悪と善、それを自由平等峻厳、この峻厳こそ、大切であるようです。克己というのがブルードン思想の骨格とか言うのと、何だか自分が気恥かしくなります。穴の中に入りたいたい気持。ブルードンの大家達に笑われそう。しかし、大沢正道氏なんかはクロボトキンの倫理的側面を断罪して妙な思想の合作をやらうなんて、不思議に思えます。私は倫理をどういうふうに理解しているのでしょうか、ここまで書いて疲れました。勉強しなければいけないようです。（吉野さんより）

☆ エスを使う会のお知らせ

今年のエスペラントが誕生してから九〇年目にあたるそうです。いくつかの商業新聞にもそのことが取りあげられたようです。

アナキストとエスペラントは古くて長いつきあいがあります。エスペラントが日本に紹介されたばかりの頃に大杉栄が熱心なエスペランティストであったことは、よく知られています。山鹿泰治は、エスペラントを通して大杉栄に出会い、アナキズムを知りました。

禁煙です。食事宿泊の用意はありません。時間厳守。）

“*Liberetana Ligilo*”（自由人の絆）は年一五〇〇円。申し込みは、郵便振替…鶴木敬憲…福岡一八〇〇七、すでに“*L.L.*”を受け取っている人は、77分の協力費をよろしく。）

見本誌の申し込みは、僕の方（上記住所）へ。二七号からオフセットになり、読みやすくなりました。

（ひろせ・しんじさんより）

## ●海外だより

今月から本欄を担当することになった。新着ということにこだわらず、最近の外国誌紙をとりあげ、その内容の一端、海外の状況を紹介し、興味深そうな単行書についても触れ、外国からの私信なども適時掲載したい。

※ スペインの状況については前号に紹介されているが、二つ加えておく。

スペイン共産党のドロレス・イバルソが帰国したことは先日の商業新聞に報じられているが、昨年春に、スペイン革命の指導者の一人、バクーニン著作集と全集の翻訳者、スペイン・サンジカリズムの代表的理論家であったサンティランがすでに帰国していた。彼の帰国と相前

ところで、ここ数年、国内では、アナキストのエスペラント運動は、さかんだとは言えません。それでも、エスペラントの国際誌“自由人の絆”の読者は急増しました。日本からの手紙も毎回“自由人の絆”に載るようになりました。もともと沢山書いて、世界に情報を送り出すべきですし、もともと沢山の情報を国内に流すべきでしょう。

習うだけに苦労をして、ちつとも実用してくれない人を多く見かけます。習いはじめたその日から、実用できるのですから、是非、エスを使って下さい。

残念ながら、エスを習う時間のない人のために、海外からの情報も訳出しようと、今、取り組みはじめました。手はじめに、C・N・Tが再び活発に動きはじめた、という呼びかけの文を“アナキズム”第一五号に訳出しました。是非読んで下さい。面白い記事は沢山送られてきています。情報を、少数のエスペランティストの手に独占することなく、皆に分けるために、是非協力して下さい。

情報の回転をよくするために、毎第一土曜日六じに僕の所で集まりをもっています。文京区春日一七―一七―五〇六、ひろせしんじ<sup>TEL</sup>八一一七九六七、に連絡して下さい。（地下鉄後楽園駅すぐ側）。（僕の所は

後して、今までは英訳でしか読むことのできなかったアナルコ・サンジカリズムの基本書の一つに数えられている『革命の経済組織』の簡略版が刊行されている。なおフェデリカ・モントセニはまだ外国にいるようである。一九三六―三九年のあいだ活動的であったムヘレス・リブレス（自由女性）という女性のリバタリアン組織が新しい路線にそって再建され、女性の解放のために活動し、他の急進的な女性グループと協調しはじめた。この運動は男性の支援も受けており、その闘争は男性に対して向けられるのではなくて、男性と女性を対立する位置におく政治的社会的構造に対して向けられるべきであると考えている。

※ ポルトガルより

……ポルトガルの政治状況に関するかぎり、大へん興味深いことに注目すると、急進左派のものを含め、諸政党は、ますます信用されなくなっているの、民衆の信頼を喪失しつつあります。……他方で、技術学校や大学に通う若い学生たちの間にさまざまなアナキズムの潮流が出現しています。私の考えでは、これらのグループは生態学的教育学的システムへ闘争を集中するやり方できわめて過激なものです。ですけれども、彼らが出現したということは、ポルトガルにおけるわれわれの運動に新し



い展望をもたらす確固たる一要素となるでありましょう。サラザール博士のファシスト独裁のあいだ、タラファル強制収容所には多くの同志が投じられ、死んだものもおりますが、現在、私はそのリベルテール組織についての公表された情報を収集しているので非常に多忙です。どうぞ、われわれと接触を失わないで下さい。

リベルテールのあいさつをもつて

エミリオ・サンターナ

※ 六月四日、ソ連で新しい憲法草案が発表されたがサム・ドルコフの「キューバ憲法についてのノート」のように、ソ連憲法について評釈が発表されるかどうか、注目したい。ドルコフの上記論文は以前発表された「キューバにおける権力構造」への補論で、ごく短かいものだが、筆者はそこで、キューバ憲法はスターリン憲法と同じやり方で独裁を恒久化する、としている。

キューバについてはアムテステイ・インタナショナルの一九七五―七六年の年次報告にも取りあげられているが、七五年五月に、亡命キューバの労働者グループの代表者会議が前文、政治問題、経済問題、労働組合問題、社会問題、一般事項から成る声明文を発表しているが、その前文の一節には次のように書かれている。

キューバは社会主義体制ではない。なぜなら、自由な

き社会主義は全く疑いもなく隷従、陋劣、卑屈以外の何ものでもない。現実にキューバに存在しているのは全体主義国家であり、そこでは軍国主義化された国家経済が人民を強制している。いわゆる「社会主義的所有」は社会主義的でない。労働人民には何ものも属さず、すべては国家、すなわちわずかの特権的な少数者、新しい階級的手中に政治的経済的権力をとてつもなく集中しているものに属しているからである。

バクーニンの文章を想起させるものがある。日本人によるキューバ関係書は、「人民は社会主義建設に励み、笑顔を絶やすことなく、空は青く澄んでいた」式の外交辞令が多いが、実情はそうではなさそうである。

※ 今まで日本のアナキズムとは全く関係のなかった言語の文献から注目すべきものを二つ。但し、いずれも未見。

ブルガリア国内ではアナキスト雑誌は刊行できないがオーストラリアのシドニーで、亡命ブルガリア無政府共產主義者連合のブルガリア語の月刊誌「われらの道」が発行されており、今年で二五年になるという。外部からの援助もなく、四大陸の十ヶ国に散在する少数の労働者によつてスターリニズム独裁に対する闘争の一つとして刊行されている。

バクーニンの『インタナショナルの組織』がペルシャ語に翻訳された。非常に珍らしい文献だと思われるが、訳者たちはクロボトキンのアナキズムの哲学をも流布しようとしているようである。

※ 「アナルコ」という冠辞はかなり使用されているようだ。たとえば――

アナルコ・フェミニズムについて。

およそ四〇人の女性が最近、フェミニズムとアナキズムについての研究集会を開いた。集会での討論は女性に影響を与えている広い範囲にわたるトピックに及んでいる。たとえば、公式に構成員であるということのない非階級的な形態の組織、駐車場を遊び場に、バスの車掌に乗車賃を集めさせないようにし、スーパーから食料品を持ち出すことを含めた直接行動の提案がそれである。また、集会は、アナキズムが法律と権威に反対する以上、いかにして女性は自分たちの特別の状況に影響する法律に関心を集中することができるか、も討議した。例をあげると、議会と法のレベルで闘争することに焦点をあてるキャンペーンや堕胎法案である。機関紙の刊行も計画されており、それには六月初旬に予定されているフェミニズムとアナキズムに関するロンドンでの集会の詳細、ペギー・コーネッガーの論文「アナキズム、即フェミニ

ズムの縁者」も発表されるようである。

アナルコ・ヒッピーズについて。(あるアナルコ・ヒッピーの手紙から)。

……多くの人々が体制の一部となり、運動からドロップ・アウトしておりますが、「大地の子<sup>ランド・キッズ</sup>へもどれ」という運動はドロップ・アウトしておらず、効果的な革命勢力が残存するためには農業的な基盤を必要とする、と私は考えております。運動をささえる農業コミュニティ網が必要でしょうし、瀕死の過度に化学的に多産化された土地を再墾し、民衆に立派な有機的な農産品と肉を提供することになるでしょう。……こうした一連の農業改革の考えが継続革命にとつてきわめて重要であるでしょう。

※ 単行書関係から二つニュースを記す。

前号の平井貞二氏の書面にあつたタリッツォの著書はフランス語でなくイタリア語である。タリッツォには別に四〇〇頁を超えるマラテスタ時代以降最近まで一〇〇年間のイタリア語のみのビブリオグラフィもあるが、今度の著書にはアヴリッチという大家の序文がついているから、著者は新進気鋭の研究者ということであろう。

右のアヴリッチの「クロンシュタット」は先ごろ日本語に訳されたが、原著の刊行後にモスクワで発表されたボル側の二著以後の論文「新ソヴェト・アナキズム史」

(一九七六年)もあり、アヴリッチの現在の到達点は後の論文により鮮明かつ高度になっていることであろう。訳出が待望される場所である。

(かなり総花的になったができるだけ多くのことを載せたためである。今後この方針にしたいが、長文のものは、適宜別箇にとりあげたい。 編・梅田順子)

## ●野 火

(江藤・編)

☆リベロ(アナキズム研究センター・ニュース) 77年5月、44号より

▽OIRA・NIPPONその後……「センター書庫はR氏の借りた土地(富士宮市杉田251)にあり、木造の2階10畳のスペース」「二千冊を超える単行本や貴重な新聞やパンフ類多数を半永久的に安全に納めておくには、OIRA・N所有の地に不燃性の書庫を建てるしかない」……「それには多額の予算がいるので、確実な建設計画を立て、土地や建物を確保すると同時に、OIRA・Nを法人化する必要がある」。『文庫の利用やOIRA・Nの企画を遂行するためには東京分室が不可欠である……それで近々東京分室を作ろうと準備している。文献の

閲覧室と集會室と印刷の仕事をその分室は兼ねたいと思っているが、今から具体化の作業をしていくので、企画の提案や協力者を求めたい。……」

▽77年OIRA・NIPPON夏期セミナー……7月29日、31日、宝寺(京都と大阪の中間の国鉄大山崎駅近く)にて、連絡はリベロ社(TEL〇七五〇七二二〇二四五)へ。主題、「ブルードンをめぐって」。内容、レポート「自由連合論について」「所有とは何かについて」「弁証法について」「ブルードンとマルクスとシュティルナーの思想的位相関係」「ブルードンの芸術論」他。展示、海外からの雑誌、書籍。

▽編集雑感……43号(昨年11月)から6ヶ月ぶりの発行、「編者が公私ともに多忙を極めたので、今号44号は実に難産だった」という。京都市内の救急病院で働き始めたこと。友人の病氣。そして、東山薫君の死。……5月15日京都の三条河原での追悼集會(三里塚・東山薫君虐殺抗議・京都市民の會)の準備のこと。集會で編者が読みあげた文。……6年前第一次代執行の時、僕は君と共に野戦病院のテントで約一か月生活して、活動的な君を知った。車を運転し機敏に飛び回っていた君の姿が目につく。……君は三里塚の人々と共に住み、共に闘って来た。君は救済をしていたということで、特に顔を

る、無意識の利敵行為にほかならない……。ガサ入れなんて、そう度々、自分にあるわけではない。この敵が自分に近づいてきた機会は、それだけ、返す刀が敵にきりつけられるということである。としたらこの絶好のチャンスをむざむざのがしてよいものか!」なお、因ステッカー事件の「特別抗告申立書」の⑤を一部千円でわけている。

知られていた。体つきも大きく、声も大きく、よく動く君は目立っていた。そんな声は機動隊にも良く知られ、最も目ざわりな存在であった。だから君は、狙い撃ちされたのだ。機動隊は三里塚に生きる君を、そして開港に反対する人間としての君を抹殺したのだ。いま必要なのは同情ではない。君を虐殺してまで空港を作ろうとする者への怒りだ。斗いの中で土地を耕し続ける三里塚に学び、君に学び、僕は僕の斗いを続けてゆくことを誓って追悼の言葉とする。」

☆イオム通信(向井孝) 6月4日、206号より

▽ガサ入れ・準抗告・特別抗告(因ステッカー事件)……「刑事訴訟法四二九条は、その第二項で「勾留、保釈、押収又は押収物の還付に関する裁判」の取消、変更を求めるため準抗告の申立を規定しているが、ガサ入れを受けた者で、準抗告をするのは百に一もない」という。リベロでも数年前十数名がやられたことがあるがなんの対応もできなかったことが反省される。向井さんは、ガサ入れに対しては必ず準抗告Vをやることを主張、「ぼくの経験であなたの準抗告提出に協力する」という。ガサ入れに反抗しないのは「八戦線逃亡Vにもひ」とい。斗いの放棄であるだけでなく、今後益々、警察のガサを恣意的にさせ増長させることを助けることにな

李一哲を釋放せよ!

楊曦光を釋放せよ!

四・五天安門事件

の被捕者を釋放せよ!

